

## 8. 地元協力者からの寄稿

### 環境研は村繁栄の礎

古川 健治  
元六ヶ所村長  
元六ヶ所村教育委員会教育長



環境科学技術研究所は、設立当初から村民の関心も高く、しかも特色ある外観から尾駈レークタウンのシンボルとなり村が誇る中心的な研究施設として運営されてきました。

時の流れは早いもので、環境研も歴史的に評価される多くの研究実績を積み重ねて設立 30 年の節目の年を迎え、この度、記念して「環境研 30 年史」発刊の運びとなりましたことは誠に喜ばしく、関わりを持った一人として感激に堪えない所であります。

私が責任ある立場になって、関わるようになった時には、既に 10 年以上の歴史を刻み、研究実績も高く評価され、村民の期待も大きくなっていましたので、私としてはこの優れた研究実績は必ず機能し、村繁栄の礎になるものと強い思いを持って対応してきました。

思いの根底にあったのは、村が原子燃料サイクル事業を重要産業と位置付けて誘致しようとした際、最大の争点になった環境汚染問題であります。

再処理工場から排出される放射性物質によって環境が汚染され、癌が増える。海が死に漁が出来なくなる。農産物が汚染されて食べられなくなる等。不安を煽るような厳しい情報が飛び交い、地域が嵐のように荒れた時期があったからです。荒れた地域も年を重ねながら様々な活動が展開されるたびに不安も払拭され落ち着いた社会状況になり、平行するような形で誘致した一連の事業が進められ、現在の村の姿になって来たものであります。

紆余曲折した一連の事業がここまで進んで来たその過程において、環境研の果たした役割は極めて大きなものがあったと思っています。

蓄積された研究データが様々な事象の科学的根拠になったこと、施設の参観や研究内容の公開発表、放射能に対する知識の普及や理解活動を進めてくれたこと等が村民に快く受け入れられ、結果として村民の意識改革と不安払拭に繋がったからです。

環境研の皆様のご功績とご尽力に対し、心から敬意と感謝を申し上げます。環境研の研究が深められ、成果が我が六ヶ所村から発信されますことを切に願うものであります。

日本のエネルギー政策や再処理工場の本格操業、福島県の原因事故が抱えている問題を考えますと、環境研での研究の重要性はより増していると言っても過言ではありません。「環境研 30 年史」発刊を契機に環境研の研究が更に前進し、充実・発展されますことを心からお祈り申し上げます。